

#### 445 Superimposed lymphoscintigraphy による乳癌所属リンパ節の診断

照井 頌二, 小山田 日吉丸 (国立がんセンター核)

Tc-99mレニウムコロイド (Tc-99m Re)を用いて、乳癌患者37例に、リンパ節シンチグラフィを施行した。Tc-99m Reを、腫瘍の内側の第3、第4肋骨骨膜に各々1 mCi/0.5ml 注入した。同様に、健側の乳癌内側の第3、第4肋骨骨膜に注入した。撮像は注入後、4時間後に背臥位でlife-sizedのlymphoscintigraphyを行った。胸骨上縁にマークを入れ、この画像と胸部X線写真とを重ねあわせ、鎖骨、肋骨をトレースし、superimposed image(SI image)を作製し、描出されたリンパ節の部位診断を行った。また胸骨傍リンパ節郭清術の行われた24例中、20例について、術後にリンパ節抽出標本のシンチグラムを行い、描出リンパ節の拡がりについても検討した。この方法では、鎖骨上、腋下～鎖骨下、及び胸骨傍リンパ節が描出された。特に胸骨傍リンパ節は37例全例が描出され、第1～5肋間に分布していた。描出率は、第1肋間が73%、第2肋間が78.4%、第3肋間が45.9%、第4肋間が13.5%であった。患側では、平均3.7個/人、健側では、3.8個/人で、特に差は認められなかった。標本のシンチグラムでは、胸骨傍リンパ節の71.3%(57/80)、腋下～鎖骨下リンパ節の10.3%(44/427)が描出された。この方法は、胸骨傍、及びLevel 2,3のリンパ節の診断に有用な方法である事が示唆された。

#### 446 乳癌症例における<sup>99m</sup>Tc-Rhenium Colloid リンパ節シンチグラフィの検討

中里 龍彦, 吉岡 邦浩, 児島 陽一, 高橋 恒男,  
柳澤 融 (岩手医大 放)  
石田 茂登男, 森 昌造 (岩手医大 一外)

<sup>99m</sup>Tc-Rhenium Colloid (<sup>99m</sup>Tc-ReC) Lymphoscintigraphyにより、病理学的に確認された乳癌例において腫瘍より各所属リンパ節へのリンパ流動態について検討した。さらに健常乳房各領域における局所リンパ流動態の検討も行った。対象はStage I、あるいはIIの女性8例(平均49.8才)で、腫瘍周囲組織2ヶ所に<sup>99m</sup>Tc-ReC 4mCi (0.4mCi)を分注し、1hr、3hr、6hrのリンパ流動態を、HITACHI-GAMMA-RCTと核医学処理システムHARP(RP-100)により画像、並びにリンパ流路パターンを検討した。各所属リンパ節領域(腋窩、鎖骨下、旁胸骨など)にROIを設定し、撮像時毎分7分間のデータ収集を<sup>99m</sup>Tc放射能減衰の補正を加えて行い、各領域へのリンパ流動態を解析した。その結果、リンパ流パターンは、乳癌例では腋窩型が主体であるが、n(-)例に比しn(+)例は、多彩なパターンを示した。他方健常乳房例ではリンパ流の方向性は、注入部位に依存している傾向にあった。

#### 447 SPECTを併用した経内視鏡的RI-Lymphography

河野 良寛, 折田 薫三 (岡大 一外)  
平木 祥夫, 青野 要 (岡大 放)

胃癌手術とりわけリンパ節郭清を合理的に行うため胃のリンパ流の再検討が種々の方法で行われている。しかし、従来の方法では上腹部深部のリンパ流を直接とらえることは困難であった。われわれは<sup>99m</sup>Tc-レニウムコロイドを用いた経内視鏡的RI-LymphographyにSPECTを併用し若干の知見を得たので報告する。対象は胃癌26例、食道胃に病変のない対照6例の計32症例で、SPECTは22例に施行した。噴門部局注例で腹腔方向の検索をした12例のSPECT画像では、大動脈周囲リンパ節は66%に描出され、特に左傍大動脈リンパ節は58%に造影された。噴門部より縦隔内への上行性のリンパ流の検索は3例に行い3例とも上行性の流れをとらえることができた。Im～Ei局注例(4例)では上行性および下行性の流れが認められ、腹腔方向は左胃動脈にそう流れが強かった。一方Planar画像はSPECT画像に比べ腹部リンパ節の描出能は極めて不良であった。以上よりSPECTを併用した経内視鏡的RI-Lymphographyは、胃特に噴門部のリンパ流の画像化に有用と考えられた。

#### 448 Lymphoscintigraphyに於ける<sup>99m</sup>Tc-MDPと<sup>99m</sup>Tc-HSA 同時皮内投与の有用性

波部 純郎, 玉城 厚, 中村 良一, 武安 宣明, 長谷 弘記,  
多比 良清, 新井 功, 廣田 彰男, 境 敏秀, 矢吹 壮, 町井 源  
(東邦大三内) 高橋 努, 酒井 健, 星野 光雄 (同核医学)

リンパ浮腫診断において、リンパ管の形態学的診断は必要不可欠であるが、従来のリンパ管造影法に代り、最近Lymphoscintigraphyが広く用いられてきている。今回、我々はリンパ浮腫16例に対しMDPとHSAを内頸直上部に同時皮内投与し良好な像を得た。比較のため、Re単独皮下投与、HSA単独皮下投与を行ない、得られた像の検討をおこなった。A群:MDPとHSA(各0.1ml, 4mCi)を内頸直上部に同時皮内投与16例、B群:Re0.2ml, 8mCi皮下投与9例、C群:HSA0.1ml, 4mCi皮下投与10例を施行した。A群が最も明瞭な像が得られ、一次性リンパ浮腫3例においては、リンパ管像の描出は殆ど認められなかったが、二次性リンパ浮腫13例では、全例においてdiffuse activityとリンパ管途絶像が見られ、そのうち5例においては明瞭な側副路が描出された。又、足背部注入に比べ内頸直上部注入ではより明瞭な像が得られた。以上より、<sup>99m</sup>Tc-HSAと<sup>99m</sup>Tc-MDPを内頸直上部に同時皮内投与し、副行路を含め、極めて明瞭なリンパ管像を得ることができ、一次性リンパ浮腫と二次性リンパ浮腫の鑑別において従来の方法より有用であると考えられた。